

2023年7月2日（聖霊降臨後第5主日、特定8、A年）

牧師メッセージ

「十字架にくくりつけられた風」

（マタイによる福音書 10：34-42）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音は、先々週から読んできた「派遣説教」の最後の箇所です。弟子たちが派遣されていく現場、現実はどうのようなものだったのでしょうか。マタイによる福音書が記された当時、イスラエルはユダヤ戦争でローマに敗戦し、宗教的・民族的支柱であった神殿は崩壊しました。イスラエルの民は苦境の中、ファリサイ派の人々を中心に宗教的基盤を固め、民族の再興を図ります。そのため、民族として「血」へのこだわりを強め、選ばれた民としての誇りを回復しようとし、さらには民族の根幹であった律法を遵守しようとする律法主義的傾向が強まりました。このような現実が背景にあるから、主イエスは今日の箇所で、家族の話をなさいました。ユダヤ人たちはまさにアブラハムまで遡る家族でした。しかし、当時のユダヤ人の実際の「家族関係」は分断が起こっていました。厳格な律法主義がもたらしたものは、律法の文字を守っているかどうかと、家族内で裁き合う現実だったのです。家族同士が「お前はふさわしくない」と、互いを神から引き離そうとしている、そういう時代。このような背景の中、「イエスをメシア（救い主）と信じるものは呪われよ」という呪詛の言葉とともに、キリスト教は明確にユダヤ教から異端とされました。これにより、クリスチャンは家族から切り離され、社会的あらゆる権利も失い、迫害が強まりました。これが、弟子たちが派遣されようとしている現場、現実でした。

今日の箇所は、その弟子たちに向けて覚悟を迫ると同時に、つるぎを持って主イエスが伴ってくださる、という力強い励ましであったことでしょう。今日の福音で主イエスは、つるぎをもって、たとえそれが同胞、家族であっても、神の愛から引き離そうとする力であるなら、その力から弟子たちを必ず奪い返すことを力強く約束されています。神の祝福から引き離そうとする力と、主イエスは徹底的に戦うのです。

しかし、どんなにネガティブな関係でも、「今ある関係性」から引き離されることは恐怖が伴うことです。「わたしたちは主イエスのつるぎによって、糸を切られた風のようにになってしまうのではないか。」という恐怖です。しかし主イエスのつるぎで解放された者は、今度は十字架にくくりつけられた風になるのです。十字架とは、わたしたちの命が120%祝福されていることの象徴です。なぜなら、人から完全に否定された者が架けられるあの十字架が、復活の象徴になったからです。どんなに人から否定されようとも、神はその人に命を与える。その命を祝福される。そのことの象徴こそが十字架だからです。主イエスのつるぎによって解放された者は、この十字架に繋がれるのです。「自分の十字架を背負いなさい」とはこのことです。それまでくくりつけられていた、互いを否定し合う関係性から解放され、祝福された命を生きる。互いの命を祝福された命として讃えあって生きる。これが、自分の十字架を背負って生きるということです。

主イエスはわたしたちを恐怖から解放し、愛されている命を安心して生きる、「十字架にくくりつけられた風」としての命へと招いています。